

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381235

研究課題名(和文)「生活科・総合的な学習」指導の力量形成に関する教育臨床的研究

研究課題名(英文) Educational clinical study about ability of leading "Living Environment Studies and Integrated Studies "

研究代表者

宇佐見 香代 (USAMI, Kayo)

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：20294275

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「生活科・総合的な学習の時間」領域の実践研究に焦点化して調査研究を行い、充実した実践を生み出す教師の指導力・指導性の在り方を明らかにし、その成果をこれからの教員養成・教師教育の現場で活用していくことをめざした。この教科領域で展開されている指導法やカリキュラム開発の過程の特質を解明した。さらに、申請者が担当・実施している教師教育論、生活科指導法および総合的な学習に関連する専門科目において、上記の検討で明らかになった知見を教材化・カリキュラム化して実施し、その評価・分析を行った。

研究成果の概要(英文)：I focus-ized this research in a study of practice in territory "Living Environment Studies and Integrated Studies ", make the state of the leadership of the teacher who invents substantial practice clear , aimed to be utilizing the outcome at a site of future teacher education. I elucidated the characteristic of the method of teaching and the process of the curriculum development developed at this subject and territory. I told the materials and curriculum by the knowledge which became clear by consideration above-mentioned in the subject of which I take charge about Living Environment Studies and Integrated Studies, did its grade and an analysis

研究分野：教育学

キーワード：生活科 総合的な学習 教師のカリキュラム開発力 フィールドワーク 体験学習

1. 研究開始当初の背景

ベテラン教員の大量退職の時代にある当時から現在にかけて、高度な指導力を要求される生活科・総合的な学習の実践の充実を図る上では、本研究が意図しているこの領域の教師の実践指導力の育成は必要不可欠のものと考えられた。にも関わらず、一般的な「学力向上の施策」の対象になりにくいこの領域の実践研究は停滞しているのが当時の背景として指摘できる。この問題意識から、本調査・分析の進展によって得られた知見を、教員養成・教師教育の実践指導力育成の現場へ還元することをめざした研究として開始した。

2. 研究の目的

現在の「生活科・総合的な学習の時間」領域の学校現場での実践研究のあり方に焦点化して調査研究を行い、充実した実践を生み出す教師の指導力・指導性の在り方を明らかにし、その成果をこれからの教員養成・教師教育の現場で活用していくことを目的とした。さらに、単なる生活科・総合的な学習の指導法研究にとどまることなく、教員養成・教師教育学の課題を踏まえ、特に若手の教師の指導力の維持・向上に直結・貢献することを目的とした。

本研究の成果は、研究構想当時の課題意識から、教員養成教育と結びつけて活用することを意図しており、現在の学校教育現場における生活科・総合的な学習の指導にあたる教員の問題解決の力量形成に、実質的に貢献する意義があるものを明確にすることを目的とした。現在の学校現場では、生活科・総合的な学習は、残念ながらいわゆる「学力向上の施策」の対象から外れることが多く、導入時と比べてその充実・向上が図られる機会が大幅に減ってきている。しかしながら、既に述べたように、ベテラン教員の大量退職が進む現在、特に若い世代の教員のための「自ら課題を見つけ、自ら学び自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力」である21世紀型学力及び「生きる力」の育成のためには、これらの領域の指導力の充実は不可欠であり、早急な対応によってこの問題への対応を図る必要があると考えた。

生活科・総合的な学習の実践を指導する上で、指導が困難だと思われるところとして、子どもと共に創るカリキュラムの開発、フィールドワーク体験学習の指導の2点に絞って実践研究を行うこととした。

まず について述べる。従来から習指導要領でその教育内容の記載が詳しくある他の教科と異なり、総合的な学習の教育内容は例示にとどまり、そのため「各学校の創意工夫」の余地を多く残す領域となっている。総合的な学習におけるカリキュラム・マネジメントにおいては、子どもの個性や興味関心、地域の実態などを教育内容に反映させることが

求められるが、総合的な学習の現場での導入時に比べて、現在はカリキュラムの形式化・マンネリ化を見ることが多い。そこで、本研究ではこの領域の本来の設定の趣旨にあうカリキュラム開発の在り方を優れた事例から考察することを目的とした。

次に について述べる。子どもの体験や活動性を重視する生活科・総合的な学習においては、その活動の一つとしてフィールドワークを取り入れることが多く行われているところである。しかし、座学における学習とその指導とは異なり、時に「活動あって学びなし」「はいまわる経験主義」と批判的な指摘がされるように、活動や体験を指導して豊かな学習を立ち上げるには、教師に高度な指導性が要求される場所である。本研究では、フィールドワーク体験学習の意義とその指導過程を、優れた実践事例の検討から明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

奈良女子大学附属小学校の「しごと」学習の授業記録の分析を行い、そこで展開されている指導法やカリキュラム開発の過程の特質を踏まえて、充実した実践を創り出す教師の指導力・指導性の構造解明を行う。埼玉大学教育学部で研究代表者宇佐見が担当・実施している教師教育論、生活科指導法および総合的な学習に関連する専門科目において、上記の検討で明らかになった知見を教材化・カリキュラム化して実施し、その評価・分析を行うものとした。

本研究における授業分析については、教育方法学の発展的な研究領域である「教育臨床学」の立場からの分析を行うものとする。「生活科・総合的な学習の時間」は、比較的新しい教科領域であると共に、その指導法も従来の座学による教授を中心とした教科教育と異なって、「自ら課題を見つけ、自ら学び自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力」を育成するための学習方法、すなわち体験学習やその表現の充実、子どもの活動性の重視など、高度な指導力が必要とされる実践である。このような豊かな学習活動とその指導の特質を解明するためには、法則化・普遍化された指導技術の応用といった従来の技術的実践の教育方法に対して、新たに、学習における出来事の「一回性」「偶然性」を尊重し、教室における具体的な文脈の中で臨機に状況と対話しながら手立てを講じる反省的実践の教育方法の立場からの検討を行うことが必要であり、教室で展開された事実を丹念に描き多様な解釈を可能にする「教育臨床学」の研究方法が有効であると考えた。

具体的な研究方法としては、子どもの自律的学習・フィールドワークの展開の過程、その事前指導と学習成果を発表させて討論させるなどの特徴的な活動を中心に、映像記録機器などを利用して、実践を記録し、検討し

た。子どもの自律的学習、学習における自治活動などを指導する教師の動きや指示事項の分析とその結果などを中心に分析した。実際は、研究対象校の奈良女子大学附属小学校教員（授業提供者だけでなく他の教員も含む）との共同で検討したり考察したりすることもあり、彼らとの共同研究となった。

このほか、現在一般に展開されている生活科・総合的な学習の指導・実践における課題や問題点を明らかにすること、さらに教師の力量形成・指導力向上一般に関する議論や課題などを俯瞰しながら本研究の課題を明確にすることなどを、文献調査や聞き取り調査によって遂行した。また、奈良女子大学附属小学校の他に、生活科・総合的な学習の実践研究の実績を積み重ねている長野県伊那市立伊那小学校や埼玉大学教育学部附属小学校の公開授業研究会の参観を行い、比較検討の対象とした。

なお、埼玉大学教育学部で、本研究課題に関連した科目として、以下の科目を担当・実施している。

- ・教師の成長と教師教育
- ・生活科指導法
- ・総合学習の原理と方法

これらは教師教育論、生活科指導および総合的な学習に関連する専門科目であるが、上記の実践の検討で明らかになった知見を教材化・カリキュラム化して本科目で実施し、研究成果を埼玉大学学生に還元しつつその評価・分析を行うこととした。

これらの科目の学ばれ方及び評価分析の具体は、以下の通りである。従来の講義形式の座学だけでなく、体験学習・ワークショップ・参加型授業・授業参観など、学生自らが活動する学びの場を多用した。このような学生の学びの過程を明らかにするために、学生の参加型授業の結果の記録を行った。「生活科・総合的な学習」観の構築の過程と同時に、教職観・学校観・授業観・子ども観などの変容について、学生自身によってどれくらい振り返ることができるか、さらに自らが得た教育的知見について自覚し表現できるかについて、検討した。

4. 研究成果

奈良女子大学附属小学校（以下奈良女附小）の「しごと」学習（「生活科・総合的な学習の時間」に相当）の参観とそこで記録した授業の分析を行い、そこで展開されている指導法やカリキュラム開発の特質を明らかにした。これをふまえ、生活科・総合的な学習で、充実した実践を作り出している教師の指導力・指導性の構造解明を行った。

具体的には、奈良女附小の杉澤学教諭の学級で展開されていた「自分たちのくらしとエネルギー」を考える「しごと」学習を追いながら、子どもが自律的な探究学習を進めてい

く時の学習展開の豊かさとそのカリキュラムの意義を考察した。

この学習では、体験学習（合宿）、調べ学習（図書、ネット情報や記事などの資料収集）、調査学習（フィールドワーク、インタビュー、質問紙調査）、NHKのニュース番組作成と発信など、多くの活動が取り込まれ、このような活動を通じて子どもたちは自律的に学びながら、自らの問いを次々と創りだし、その問いにそった探究を進めて自分の意見や立場を創りだしていた。ここでは、子どもの生活に寄り添い、子どもと共に創り出していく学習の展開そのものが、創造的なカリキュラムの創出につながっていることが分かった。子どもたちは、それぞれの生活経験や独自学習に反映されている個々の子どものこだわりなどを基盤として、それぞれの学習を自律的に深めていくので、自ずとその獨創性や創造性が発揮される。それらを学級場で相互に持ち寄って進めて行く奈良の学習法による協働的な学習の展開の中には、あらかじめ教師が想定できない学習の発展が見られることがある。学習の行き詰まりや浅さには、教師は適宜指導を加えていたことは言うまでもないが、そのような子どもと共に創る柔軟なカリキュラム展開の中には、教師主導のカリキュラムにはない学習の質の高さや豊かさがあることが指摘できた。

次に、上記の実践検討を踏まえて、行った研究は、生活科・総合的な学習におけるフィールドワーク体験学習の充実に資する知見を得ることをめざしたものである。

充実したフィールドワーク体験学習の成立の要件や、それに向けた指導の在り方を考える上で、体験を表現する言語活動に着目した。体験を表現することには、子どもたちが生活世界や体験のフィールドで得たものの価値を自ら構築し、自覚し、定着させる意味があると考えた。この点を深く検討するために、子どもたちが見た（体験した）ものやことを「書く（記述し表現する）」活動の中に、どのような教育的意義があるのか、そのような学びの成立が期待できるのかを考察した。さらに、今日行われているフィールドワーク体験学習の指導の課題にも触れて、今後の研究課題も提示した。

このような視点を持って、奈良女附小で実施された「奈良さんぽ」の「しごと」学習の展開を対象に検討を加え、フィールドワーク体験学習における充実した学習の有り様を探究し、そのような学習が成立するための手立てや条件について、明らかにした。自律的学習の実践として定評のある奈良女附小のフィールドワーク体験学習で生み出される学習の豊かさを示した。活動先のフィールドでのメモ記録の充実、調べ学習の深化、劇表現に見る学びの身体化など、この実践の意義とそのような実践を生み出すことができた要因について考察した。

上記のような研究業績を、私が埼玉大学で担当している専門科目「総合学習の原理と方法」等で教材として学生に還元し、学生と共にフィールドワーク体験学習の意義について探究を進めた。具体的には、東京都北区の紙の博物館・飛鳥山博物館に出かけ、紙すきで作成した作品を作るなど、紙をテーマにした総合的な学習のカリキュラム開発に活用できそうな知見や体験を重ね、将来の教職に資するこの領域の指導力の育成・向上を図ることをめざした。また、同じくこの講義では、学生の調べ学習や体験学習の成果をまとめてプレゼンテーションを行い、その内容や意義についての探究を行えるような議論をすることができた。ある物やあるテーマに関わって調べたり考えたりする活動は学生にとっても好評で、意欲的に活動に取り組む姿が見られたことは特筆すべきことだと考える。

一方で、残された課題として以下の点が考えられる。本研究成果に基づいた教員養成・教師教育の場における改善点の提示及び教員養成の在り方に資する提言の構築は未だ不十分であり、今後この内容を明確にして進展させる必要があると考えている。現在予告されている教員免許法の改正において、従来にはなかった「総合的な学習の時間」の指導法が項目として設定されることになった。これを受けて、今後、総合的な学習の指導法に関する科目やこの項目を含んだ科目の開設が求められることになる。本研究によって得られた「総合的な学習」指導に関する知見を教員養成・教師教育の実践指導力育成の現場へ還元する必要があると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

宇佐見 香代、フィールドワーク体験学習で子どもは何を学んでいるのか 「見る」と「書く」の間、埼玉大学紀要 教育学部、査読無、64(1)、2015、57 - 66

宇佐見香代、「奈良さんぽ」学習に見るフィールドワーク体験学習の意義 奈良女子大学附属小学校・谷岡義高教諭の実践から、埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要、査読無、14、2015、73-80

〔学会発表〕(計 1 件)

宇佐見 香代、「エネルギーを考える」学習(奈良女附小・杉澤学教諭)にみる子どもの自律的な探究とそのカリキュラムの意義、日本教育方法学会第49回大会、2013年10月5日、埼玉大学(埼玉県・さいたま市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

宇佐見 香代 (USAMI, Kayo)

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：20294275